

伊香立・真野北幼稚園「優秀園実践提案研究会」開催レポート

2022年2月24日（木）、2020年度「ソニー幼児教育支援プログラム」優秀園の天津市立伊香立・真野北幼稚園主催による、「優秀園実践提案研究会」を、天津市生涯学習センターを会場に、オンラインでの同時参加も合わせたハイブリッド型で開催しました。公立や私立の幼稚園・保育園・認定こども園、小学校、養成校の学生など、保育や学校教育関係者 38名の会場参加と約80（端末数）のオンライン参加がありました。

以下に天津市立伊香立・真野北幼稚園による開催レポートを掲載します。

研究会概要

1. 日時：2022年2月26日（木） 15:00～17:10
2. 会場：天津市生涯学習センター
3. 主題：「考える子が育つ保育の探求」
～「強い子、やさしい子、考える子」が育つ保育～
4. プログラム
 - 1) 開会式 15:00～15:05
 - 2) 実践発表 15:05～15:25
 - 3) 鼎談 15:25～15:50
 - 4) 記念講演 15:55～16:05
 - 5) 閉会式 16:05～17:10

実践発表

天津市立伊香立・真野北幼稚園では、子どもたちをとりまく様々な状況や課題が変容してきたことから、幼稚園教育と家庭教育の連携につながるように具体的にわかりやすく教育目標（目指す子どもの姿）を示すことが必要だと考え、昨年度より幼稚園教育目標刷新の構想をすすめてきた。

また、家庭教育との連携だけではなく小学校教育との連携につなげたいという願いから、伊香立小学校教育目標「やさしく強い子」も参考にし、今年度より伊香立幼稚園・真野北幼稚園教育目標を「強い子、やさしい子、考える子」（目指す子どもの姿）とした。

どのように遊びや生活を進めていこうとしているのかを子どもたちが自覚的に考え、試し、工夫し、伝えあうことにより、遊びや生活がより豊かなものになると考える。「知りたい、分かってほしい」と思い巡らせ、ものや人との関わりの中で主体的により深く考えて行動しようとする力が育つことを願い、今年度の研究テーマを幼稚園教育目標の視点から『「考える子が育つ保育」の探求』と設定した。

子どもたちが遊び、生活する中で興味関心をもったことに関わる中で、「好奇心、興味、関心を探求心につなげる」「創意工夫、試行錯誤しながら主体的により深く考えて行動しようとする力を引き出す」ために、どのような教師の投げかけや援助・場面づくりが必要なのかを研究保育や事例から振り返り考察していくことにした。

また、めだかやザリガニがすむビオトープや丸太を使った森の小途、田んぼなど、子どもたちが生活する伊香立、真野北地域の自然環境や、生き物と共生できる園庭作りをすすめ、子どもたちの遊びや生活に取り入れ「強い子、やさしい子、考える子が育つ保育」に生かしてきた。

研究会では、2020年の論文の中から4歳児2月「なぞの石を掘り出す」4歳児6月「砂場遊び・水流し」2つの事例を中心に発表した。

「なぞの石を掘り出す」4歳児2月

園庭に埋まっていた、おそらく建物の境界などの基準となる目印の正方形のコンクリートを見つけた子どもたちが「これはなんだろう」と掘り出し始めた。掘ってしまっただけではあまりよくないかと思いつつ、子どもたちの楽しそうな様子を見守りたいと考え、教師もやり取りを楽しみながら見守った。

道具を換え、やり方を考え、夢中になって掘り出そうとする子ども達。掘り出した土を入れるバケツを用意したり、道具を作ったり見通しをもち、工夫し、試し、2日間かけてようやく30センチほどの長さの「なぞの石」を掘り出すことができた。友達と一緒にやりきった達成感の心地よさを感じることができた子ども達であった。

・自ら意欲的に働きかける ・言葉のやり取りを楽しみながら仲間とともに期待をもって取り組む ・これまでの経験を生かして道具を選び、見通しをもって取り組む ・目的をもって最後までやり遂げようとするなど、工夫し、伝え合って遊ぶ姿から、考える力や科学する心の芽が育っていることを感じた。

「これはなんだろう」と自ら働きかける子ども達の発想に、迷いながらも子どもの思いに寄り添い、共に楽しむ姿勢。失敗したことも含めて、子ども達と向き合い、子どもを信じて見守り、子どもから学ぼうとする姿勢。興味関心を好奇心・探究心へと導く問いかけなど、教師としての学びを多く得ることができた。

子ども達に学ぶ姿勢を大切に子どもに教わる姿勢を謙虚に持ち続けることが、子ども達の興味関心を、考える力、科学する心につなげる大切な心持ちであると感じた。

「砂場遊び・水流し」4歳児6月

5歳児がしている水流し遊びに興味をもち、砂場に水を流し始めた4歳児。樋に傾斜をつけて水を流し始めたAは「これは自分のだからみんなには使わせない」と、一人で遊び続ける。教師は、「友達と一緒にだったらもっとたのしくなる」「5歳児みたいに長くつなげて遊ぶこともできるかも」と考え、「一緒にしたらどう？」と声をかけるがAには響かない。

保育後、教師の願いから遊びの質や方向性を考えすぎ、子どもの姿を受け止めることができなかつたのではないかと振り返った。一人一人が自分のしたいことを十分に楽しむことができるように、その子にとっての水流しの楽しさを見つけられるようにかかわることが満足につながり、遊びの充実につながるのではないかと考え、環境の見直しを図った。

3本に増やした樋を見つけて、Aはさっそく一本を独り占めして遊び始める。まだ場はあるので、前日は遊ぶことができなかつた子ども達も水流しをし始めた。同じ場で水を流して遊ぶ子ども達であったが、楽しみ方はそれぞれで自分のしたいことを安心して十分に楽しむことができた。いつの間にかAも「ぼくもやっていい？」と仲間入りした水流し。遊び方はさまざまで、ばらばらであるが、自分、そして時々自分と友達がしたいことを楽しむことができる遊びとなった。

環境を再構成し一人一人が自分のしたいことをできるようにしたことで、十分に自分のしたいことを楽しむことができ、満足や周りへの興味関心につながった。自分もやってみよう、と楽しくするために自分からアクションを起こし、つながりを感じて遊ぶ姿からは、工夫し考えようとする力や、友達と一緒にすることをうれしく思う気持ちが育っていることを感じることができた。自分が楽しければよかったAも、良くも悪くも自分のしたいことを十分に楽しんだからこそ、周りの友達の様子に魅力を感じ、ゆらぎ、葛藤し「やっぱり一緒にするほうが楽しいから」と仲間入りしようと考えたのであろう。

「考える子が育つ保育・科学する心を育てる保育」

考える子が育つ保育と科学する心を育てる保育は、子ども達の主体的な遊びや生活を大切にするとところから始まる。日々の保育を振り返り、子ども達が自ら環境に働きかけ主体となって遊ぶ保育のあり方を探り、一人一人の思いを読み取りながら生き生きと遊ぶ姿を目指して環境や取り組みの見直しにつなげてきた。また、さまざまに環境に働きかける子ども達の思いに寄り添い、子ども達の興味のあることから保育を考え、展開してきた。

子どもたちは安心安定した心持ちや生活を基盤に、主体となって遊び、楽しさを感じ、遊びをより楽しそうにしていこうと考える。さまざまな出会いや遊びに興味を持ち、やってみようと自ら働きかけ、夢中になって遊び、友達と一緒に協力したりしてやり遂げようとする。そして、「楽しかった」をエネルギーにして物事に関わり、もっと楽しくしたいと期待をもって考え、行動につなげていく。この循環の中で考える力が育つ。このことを保育の中で具現化していく営みが考える子が育つ保育の探求だと言える。そして、考える子が育つ保育は科学する心の芽を同様に育てていく。

鼎談「科学する心をつなぐ」

大津市立葛川小中学校 校長 澤村 幸夫 氏
大津市立比叡平小学校 校長 青谷 恭浩 氏
大津市立伊香立・真野北幼稚園 園長 大矢 明

対象を同一視して向き合っていく低学年と、知識や経験を通して論理的に突き詰めていこうとする高学年。小学校においては学びに向かっていく過程が低学年と高学年では違いが出てくる。そのことをきちんと捉えて児童とかかわっていくことが大切である。

ゴールがわかっていることを子ども達はおもしろいと思わない。どう進めていくのか自分たちで考え、創りだしていく中におもしろさを感じる。教科に縛られずに教科横断的に学校園のもっている魅力を生かした取り組みを工夫していきたい。

葛川での KCL (Know Come Live) 事業は子ども達のアイデアや意見を生かし、地域の資材や人材を生かした取り組みを進めている。教科学習とは異なるところであるが子ども達が意欲的に活動し、力を発揮していく取り組みは科学する心とつながっていると感じる。

教師の感性を磨いていくことはとても大切。「おもしろそう」と思う気持ち、対象に向けて一步を踏み出す行動力、はじめるとおもしろい、楽しいということがいっぱいあるということや、そう感じてきた経験を教師自身も持っていることで子ども達の気持ちと響きあっていくのではないか。子ども達が「ふしぎだな」「おもしろいな」という思いをもつと同様に教師もそうありたい。

幼稚園の領域から教科学習に移行するなかで、教科横断的な学習の元となる土台をつないでいただいて、小学校では科学の芽というか疑問やわかる喜びにつなげていくというつもりで子ども達を預かることが大切だと思う。1年生の生活科でも学習活動を固定化した年間計画ではなく、KCLにつなげるなど柔軟な取り組みにしていく。総合的な学習の時間も単に総合、探究の学習にするだけでなく、それをうまく伝える国語であったりとか、表現、図工であったりとか、そして中学校での発信につなげるとかそういうことを思っている。

記念講演 「環境との関わりから考える『科学する心』」

中井 清津子 氏/相愛大学 教授

幼稚園教育目標を具現化するために、教育目標の視点から保育の質を考え園内研究の視点にすることや、地域のよさを生かすために新しいアイデアを取り入れてきたこと、保護者や子どもと共有していく取り組みは園の特長となっている。一人一人の安心・安定を基盤にして遊びを発展させていくこと、それと共にクラス経営を大切にしているということ、ここにいろいろな意見や多様性を受け入れる土壌が育まれている。

幼い子ども達は自己中心的にものごとを考える。そこから集団での遊びや生活を通してこのゆれや葛藤と向き合い、相手のことも考えるようになっていく。生き物や自然との関わりを園生活に取り入れていく中

で、子ども達が揺れたり、考えたりする。「生き物の立場になって考えてみる」という問いかけがあったが、子ども達が考える足がかりを教師が作っていくということはとても大切である。

科学する心を育てることは心の揺れに着目すること。子ども達は自己中心的、身体的感覚的な捉えから、自分の視点から物事を捉えるようになり、相手の視点へ、さらに「共に」の視点へと関わりを深めることにより視点を変えていく。このように関係性を作り出していく力を育てていくことが、多様性の尊重、SDGsなどこれから求められている力であり感覚である。

遊びの中で探求・学びの課程として、遊びの創出、没頭、保育の振り返り、心の揺れ、友達の存在、保育者の存在などが研究発表の中でキーワードとしてあげられていた。事例でも示されていたように科学する心、探求の質を深めていくにあたって、子どもの目線に立って環境を作っていくことは重要である。

科学する心を育てる環境として

- ・身近な生活で多様性に出会える環境 ・選択性のある環境 ・地域のよさを取りこんだ自然環境
- ・身近な自然環境への気づきを促す園庭環境 ・心ゆくまで関われる時間と場所
- ・情報の受信や発信ができる環境 ・地域のリソースを生かす工夫 などを大切にし、多様な環境を幼児と共に創り、共生社会に向かっていける感覚を育てたい。

保育者として、探求への足場かけ、足がかりを作ることを意識していくことを大切にしたい。

- ・子どもの日常から興味・関心を見つけ心を寄せて楽しむ姿勢（保育者の科学する心）
- ・子どもの気づきに共感し、次につながるきっかけをどう提示するか
- ・疑問を共有したり、一緒に調べるなど、子どもの向かう視線を大切にし、子どもの学びを理解する
- ・一人一人の考え方や気づきを大切に聞きながら、子ども同士の考えをつないだり体験につなげる
- ・一人一人のよさに気づき一緒に学びあう学級の風土をつくる

人は関係性の中で生き・生かされているということを意識しながら、人間の基本的な力をより豊かに伸ばしたいと考える。自然や人との関係性を創り出す力はさまざまな地球環境の変化を乗り越え、人間としてのあり方を問い続けながら、持続可能な社会の創り手となる力につながると考える。

保育の質を考えると、誰もが生きやすい社会の実現を目指すSDGsを意識し、共生社会の実現に向けて、科学する心をもった子どもを育てたいと願っている。そのために、私たち保育者が、今を生きる子ども達との多様性を大切に豊かな感性と創造性を高めていきたい。

おわりに

会場、オンラインでの同時参加というハイブリッド型の研究発表、小中学校の校長先生と幼稚園長の鼎談など、これまでにない形での研究発表を開催することができた。会場からは久しぶりの会場参加を喜んでくださった方も多かった。平日ということもあり、オンラインでは複数で参加する学校園も多くあったようで多くの方に参加いただくことができた。

ご参加いただいた皆様、開催に至るまでアイデアやご指導をいただきながら共に進めていただいた皆様に心より感謝いたします。